

■若手に読んでもらいたい本

北野博巳のおすすめ
富山大学大学院理工学研究所 教授



分野：一般
書籍名：水はなんにも知らないよ
著者名：左巻健男
出版社：(株)ディスカヴァー・トゥエンティワン
出版年：2007年
価格：1,000円(税別)

「水にありがとうと言うと美しい結晶ができ、悪い言葉を投げると汚い結晶になる」と信じ込んだ教員達が、このことを公教育の場で子供たちに教えた。この事実には、日本人には科学リテラシー（科学的知識を使って、証拠に基づく結論を導き出す能力）が乏しいと常日頃感じていた筆者が危機感をもち、水を巡るニセ科学を指弾した書である。世に氾濫する「〇〇水」にはずいぶんと怪しいものがある。本書ではその多くについて問題点を指摘している。

私は、水の構造や性質は接している材料の物理化学的特性を反映しているので、水をプローブとして材料の特性解析が行える、つまり、水は材料を「知っている」という立場から研究を行ってきた。したがって、最初に本書のタイトルを見たときにはいささか戸惑った。しかし、一読すると、前処理用器材から分離後も水にはその影響が残り、それが健康によいなどという、水を売らんがためのさまざまな宣伝文句を科学的

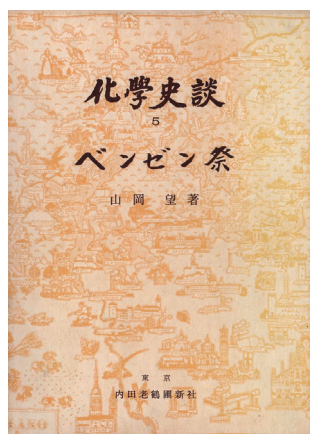
に否定する書であった。

この本の筆者によると、多くの日本人は、科学的というお墨付きに弱く、科学技術の知識も乏しいが、そこには、我々が受けてきた理科教育が断片的、非系統的で、身につけておくべき基礎的事柄が欠落していることが大きな影響を与えている。本欄では、研究者の道を進む上で指針となる書が多く紹介されている。昨年、日本の科学界を震撼させた事案にも、日本の科学リテラシーの不足が根底にあるように私には思え、それに警鐘を鳴らす本書を選んだ。



■私の役に立った本

舟橋正浩のおすすめ
香川大学工学部 教授



分野：化学
書籍名：化学史談
著者名：山岡 望
出版社：内田老鶴園新社
出版年：1958年
価格：全8巻 1,500円~2,000円

10年ほど前のある日、体調不良と心の不安に耐えきれず、図書館に現実逃避したところ、たまたま、「化学史談」第5巻の「ベンゼン祭」というタイトルが目に入った。「トルエン祭だったら参加してもよからうが」などと、不埒なことを考えてこの巻を手を取った。

ページを開くとケクレ先生の言葉が目に入った。「私がリービッヒ先生の実験室に入った最初に、先生が言われた『君が化学者になりたいと思うなら、健康を損なうくらいの覚悟が必要だ。身体を心配しながらやるような勉強では、今の世に化学の方面で、何事もやれるものではない』と教えられたお言葉、このお言葉通りに私は忠実に従ってきました」。体を壊しては元も子もないのだが、研究にはそれくらいの覚悟が必要であり、学問にはそれ程の価値があるということである。「本気でやらんか、このバカ者が！」と、ケクレ先生よりお叱りを受けたような気分になり、実験室に戻った。

「化学史談」は、有機化学勃興期の研究者

群像や化学研究の展開などを描いた全8巻に及ぶ大著である。筆者は旧制六高の名教授山岡望先生。リービッヒが、グリースが、ケクレが、ヴェラーが、「坂の上の

雲」を目指して歩いていく一種の群像劇とも言える。第5巻前半部は、1890年3月11日、ベルリンにて開催されたベンゼン分子構造提案25周年記念シンポジウム（ベンゼン祭：Benzolfest）の記録である。後半部にはベンゼンをめぐる有機化学の発展の歴史が記載されている。

教科書には結論しか書かれていない。その結論に至るには、何人もの研究者の何十年にもわたる熱い戦いを必要とした。電子すら発見されていない時代に、彼らは有機化学の基礎概念を構築していったのである。時には、この巨人たちの熱い言葉に耳を傾けるのも有益なことであろう。

